

「きゃー、沈むー」

水を張った田んぼに元気な声が響きます。旭志伊坂で5月10日、食と農の体験会が開催されました。

この日は田植え体験があり、子どもから大人まで25人が参加。市外からは熊本、阿蘇のほか、兵庫県から訪れた人の姿も。主催は地元の農産加工グループ「あじさいグループ」の皆さん。「若い人に農業と食のありがたさを知ってもらおうと思いました」と代表の上田スズ子さんは話します。

### 農業で地域おこし

体験会は全8回で、かかし作り、稲刈り、もちつきなどを実施予定。作業の後は田舎料理を振る舞い、食のPRも行っています。「毎回20人を越える人が参加してくれます。みんな「楽しかった、また来ますね」と言ってくれます。うれしいですね。手作りかかしも好評で、テレビや新聞にも取り上げられたんですよ」。毎年行う農作業が、地域おこしイベントになりました。

農家の高齢化が進む地区にとって、参加者は一時的な農業の担い手にもなっています。「農業に関心を持つ人は増えていきます。これからも農村の魅力をもっと多くの人に伝えていきたいです」

### 農業の今

平成7年に約344万戸あった日本の農家は、平成22年には約252万戸と15年で大幅に減少しました。平均年齢は65・8歳と高齢化が進み、35歳未満は5%と担い手は不足しています。本市の農家数も減っています。平成12年の3047戸から、平成22年には2464戸と、10年間で約600戸も減少しました。

農業の活性化に向け、国・県・市は、給付金や奨励金制度、特産品の開発、環境保全、相談窓口の開設などさまざまな支援を行っています。こうした取り組みもあり、最近では就農者の数が少しずつ増えてきました。規模拡大や担い手確保のために、法人化を目指す人も出てきました。田舎暮らしに魅力を感じ、都会から移住して就農する人も増えています。

少しずつ復活の兆しを見せる農業ですが、市場価格の低下、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）問題など、農業を取り巻く環境は依然として厳しい状況です。そんななか、地域の特性を生かし、時代のニーズをつかみ、創意工夫で農業の活性化につなげようとしている人たちがいます。

### 就農・農業活性化などの支援制度

#### ▼国

##### ①青年就農給付金（準備型）

農業大学などの農業経営者育成教育機関、専心農家・先進農業法人で就農に向けて必要な技術などを習得するために研修を受ける場合、原則として45歳未満で就農する人に対し、最長2年間、年間150万円を給付します。

##### ②青年就農給付金（経営開始型）

経営が不安定な就農直後の所得の確保を支援するため、原則として45歳未満で独立・自営就農する人に対し、最長5年間、年間最大150万円を給付します。

#### ▼県

##### ①くまもと里モンプロジェクト推進事業

美しい景観づくり、耕作放棄地の活用、地域資源を生かした特産品の開発など、幅広い取り組みを支援し、持続可能な農山漁村を目指します。

☎県むらづくり課 ☎096(333)2415

##### ②熊本県新規就農支援センター

☎096(385)2679 ☎096-213-1239

④ <http://www.kuma-farm.jp/>

青年農業者の就農準備を支援するための相談窓口です。農業の仕事内容や就農方法など、個別の相談に応じています。農業法人の求人情報、農業体験の募集、就農相談会といったイベント情報を発信しています。

#### ▼市

##### ①新規農業就業奨励金

やる気のある農業後継者の育成を図るために交付します。申請は地元区長へ連絡して農政課で申請してください。奨励金 1人当たり30万円

・申請期限 11月11日(水)

・申請条件 次の全ての項目を満たすこと。

▼平成27年4月以降専業農家として就農し、今後も継続して営農していく人 ▼市内に居住し、満17歳以上40歳未満の人（基準日：平成27年4月1日） ▼中学卒業者は卒業後2年間就農し、定着可能な人 ▼就農奨励金の交付を受けた年から起算して5年間は、毎年就農状況の報告を行うこと。（農業を辞めると奨励金の返還が必要です）

##### ②結婚祝い金

専業農家およびその後継者などが結婚するとき、祝い金を交付します。農政課で申請してください。

・祝い金 1組当たり5万円

※詳しくはお問い合わせください。

☎農政課農政係 ☎0968(25)7221



中田沙織さん  
(兵庫県)

初めて田植えをして、農家の皆さんの苦労が分かりました。普段はスーパーの野菜しか知らないのと取れたて野菜はとてめざいたくです。料理は全部おいしかったです。



名島莉恵さん④  
百桃さん④  
(熊本市)

土をいじるのが好きで、子どもにも農業の楽しさを感じてもらおうと思いました。(莉恵さん)

どうやってお米が作られているのかを知ることができて良かったです。(百桃さん)



1. 代表の上田さん。この体験会は「くまもと里モンプロジェクト推進事業」を活用した。2. 泥に足を取られながら初めての田植え作業。3. 手作りのかかしづくり。鳥よけではなく人を寄せることが目的。4.5. 地元の中学生も料理を手伝い、地域の食文化を受け継いでいる。

kikuchi marugoto note

# 菊池まるごとと農人

私たちの命の源である「食」を守る農業。しかし、高齢化や担い手不足など、現状は厳しさを増すばかりです。そんななか、農業の活性化に取り組んでいる人たちがいます。今回は、菊池の農業とまちづくりについて考えてみます。



「これまでずっとがむしゃらにやってきましたので、足跡をたどる良い機会になりました」と二人は今回の受賞を振り返ります。

瀧内さんは現在、黒毛和種の肥育牛200頭、繁殖牛150頭を飼育。肥育と繁殖はそれぞれ別の農家が経営するのが一般的ですが、先端技術の導入や作業効率化などの取り組みで、肥育・繁殖の複合経営を成功させました。地域貢献活動も評価され、昨年度の県農業コンクールでグランプリ、7月には全国農業コンクールで名誉賞を受賞。畜産農家の先駆的モデルとして高い評価を受けています。

## ゼロからのスタート

権二さんが就農したのは平成2年。牛肉輸入自由化を翌年に控え、勤務していた農協を退職。畜産業の道へと進みました。「畜産農家にとっては競争が厳しくなるから、普通は辞めるんですけどね。でもピンチはチャンスだと思っただけです。経営のやり方次第ではうまくいくんじゃないかと一念発起しました」。土地も牛舎もないゼロからのスタート。輸入自由化で元牛の価格が下がることや、助成制度の開始を予測し、初期費用が抑えられると考えま

した。

最初は廃業した牛舎を借り、赤牛の飼育から始めました。後に、輸入牛に對抗するため高級な黒毛和種に転換。通常の子牛より安い若い牛を購入したり、繁殖にも取り組んだりするなど工夫を重ね、徐々に規模を拡大しました。「始めるのが遅かったから、普通にやっけていても他の畜産農家に追いつけない。10年後には追いつきたいという思いで新しいことに挑戦してきました」。年間約2千万円必要だった飼料代も、現在は飼料を提供してくれる耕作農家と連携することで100%自給を実現。地元の飼料で育った地元生まれの牛として、安全・安心をアピールする菊池ブランド牛の確立にも取り組んでいます。

## 地域連携で農業を活性化

「地域の農業を活性化させるためには、地域での協力・連携が不可欠」と語る権二さん。こうした取り組みを地域で推進していくために、平成17年に「JA菊池一環繁殖牛部会」を設立しました。活動が実を結び、当初736頭だった繁殖牛の数は、ことし1月時点で4200頭まで増加。子牛の数が全国的に不足する中、生産力の拡大に



たきうちけんじ りえ  
**瀧内権二さん・里恵さん夫妻** (九の峰)

第64回全国農業コンクール全国大会 名誉賞  
平成26年度熊本県農業コンクール大会 経営体部門 秀賞(グランプリ)

# ピンチはチャンス 連携で農業に元気を！

成功しています。

繁殖牛を阿蘇の牧場に放牧し、飼育作業の効率化や草原維持といった環境保全にも貢献。研修生の受け入れや、畜産農家の後継者を従業員として雇用するなど、後進の育成も積極的に行っていました。

畜産経営を始めてことしで25年。今後について聞くと「ちょっと休みたい」と二人は笑います。「なかなか休みが取れないので、もっとゆとりある経営体制にしていきたいですね。それから、菊池産飼料で育てた菊池産牛の生産体制をつくり、菊池ブランド牛の確立と地域農業のさらなる活性化を目指していきたいです」



1.4. 農業コンクールの事前視察で取り組み内容を説明する瀧内さん夫妻 2.3. 雇用了就農者には自ら考えて行動することの大切さを説き、畜産経営の難しさと楽しさを伝えています

## 私たちは未来の畜産農家です！



吉良聡一郎さん (岩本)

### 新規就農します

繁殖牛の飼育を始めるために勉強しています。畜産は農業大学などで勉強してきましたが、実際に体験するのは全然違う。県外に行く人もいなか、近くに受け入れてもらえる場所があるのはありがたいです。



橋本昇汰さん (合志市)

### 後継者です

複合経営の手法を学んでいます。天候や牛の状態を見て、自分で考えて行動しなさいと自主性を尊重してもらえるのでありがたいです。きついときもありますが、将来のためにしっかり頑張りたいと思います。



1.店頭には数々のオリジナル商品が並び 2.体験型イベント「菊池に行こう！百姓三昧」を毎年開催。参加者に安全・安心な菊池の食材をアピールし、生産者との交流も行っている 3.4.自然食レストラン「郷の恵」。菊池の農産物をふんだんに使った田舎料理が人気 5.菊池未来農場には現在12人の農家が登録 6.「耕作放棄地の解消だけでなく地元住民の雇用の場になり地域活性化にもつながっている」と話す菊池未来農場取締役の合志武治さん

# 売るのは〴〵モノ〴〵じゃなく〴〵思い みんなが潤う社会にしたい



渡辺商店 代表取締役 わたなべよしふみ 渡邊義文さん(上町)

第64回全国農業コンクール全国大会 優秀賞  
平成26年度熊本県農業コンクール大会 食と農部門 秀賞

「農家から消費者までみんなが潤う社会にしたい」。こう語るのは、昭和29年から続く酒屋で3代目を継ぐ渡邊さん。平成15年に始めた無農薬米作りを機に、生産者や加工業者と連携した無農薬・無化学肥料の農作物や、加工品の開発・販売に着手。インターネットショップや農業体験、環境保全型農業の普及、自然食レストラン経営、新規就農者支援など、幅広い活動を続けています。

## 生産者の思いを付加価値に

「環境保全の講演を聞いたことがきっかけで無農薬米の販売を始めました。次世代の子どもたちのために、食物の自給率を上げ、美しい自然環境を残していくことが責務だと思ったんです。でも、最初は全然売れませんでした。そこで、米作りの苦労や生産者の思いを知るために、自分で無農薬・無化学肥料米を作ることになりました」

菊池環境保全型農業技術研究会の指導を受け、初めて作った米が九州米サミットで最優秀賞を受賞。試行錯誤の末、オリジナル焼酎も完成させました。生産の喜びと6次産業の面白さを知った渡邊さんは、雑穀や野菜、加工品など商品の数を増やしていきます。「う

ちで取り扱っている商品は地元産の素材で作られたものだけ。生産者の思いがたくさん詰まっているんですよ」

こうした商品を広く知ってもらおうと、インターネットショップ「自然派きくち村」を開設しました。「生産者の手間暇と思いを商品の付加価値として、消費者に伝えられたんです。それを効果的にできるのがネット販売でした」。商品のページには生産者や開発のストーリーを紹介。付加価値が安全・安心の「菊池ブランド」として認知され始めると、次第に口コミが広がり、全国から多くのリピーターを獲得。ゴボウ茶など数々のヒット商品を生み出しました。

出品手数料0円、一括買い取りなど、生産者が安心して出品できる仕組みも取り入れました。「生産者の言い値で全部買い取ります。もし売れなくても、生産者が損することはありません。店のリスクは高いですが、自信を持って販売しています。菊池の農産物の品質は折り紙つき。それに磨きをかければ、消費者にはちゃんと伝わるんです」

## 自立できる農家の育成を

菊池の自然をこよなく愛する渡邊さん。環境保全活動の普及と新規就農者

支援のために、無農薬米の生産者を増やしていこうと考えました。「新規就農は土地も道具も要りますし、しばらくは収益も期待できません。そこで『全部買い取るから無農薬米を作りませんか』という提案を始めました。そうすれば安心して始められますよね。ネット販売と同様、うちのシステムは生産者のメリットが最優先なんです」

常に生産者の立場で商品を扱う渡邊

さんは、その思いを次のように語ります。「モノ〴〵だけ売るのはなく、〴〵思いも売るのが商売。僕は職人でも農家でもありません。でも、作り手の気持ちに分かる商人でありたい。だから、うちの店にはよそじゃ買えない、人の思いが詰まったものしか置いていないんです。こうした商品のニーズは確実に高まっています。生産者も加工業者も消費者も、みんなに潤ってもらうことが自分の役目だと思っています」

ことし4月、地域の活性化を目的に、旭志麓に株式会社菊池未来農場を設立しました。従業員は地元農家の皆さん。当面は麦や大豆など、雑穀を中心に栽培していきます。「将来は新規就農希望者を受け入れ、菊池で自立できる農家を育成したい。Iターンで農業をしたいという人も増えてきました。移住・定住の促進にもつながりたいですね」



U  
ターン

菊池市で新規就農した

給付金制度は私たちへの投資だと思っています

稲作農家 みどりよしひろ 實取義洋さん（寺小野）



米をチェックする實取さん。「米を育てながら環境を守っています」（写真㊸）。地域のひととの交流を大切にしている實取さん。取材中も通りすがりのひとと米づくりの話題に花が咲いた（写真㊹）。給付金などの制度を活用して農機具を導入（写真㊺）。

4年前、実家のあった龍門の寺小野区で新規就農しました。最初は機械もノウハウもありません。まだ収入も少なかったため、家族を養うために環境教育のアルバイトに通っていました。農業に打ち込める時間が取れず、もどかしい日々でした。

そんなとき、青年就農給付金制度が始まったんです。市の制度も活用し、規模拡大を見越した設備投資で足元を固めることができました。こうした制度は、私たち新規就農者への投資だと思っています。何倍にでも増やして、税金として返せるように努力しなければなりません。

米作りのアドバイスなど、地域の皆さんにはいつも助けられています。交流を深めるうち「うちの田んぼを使わね」と耕作放棄地を借りることもできました。おかげさまで規模拡大も順調に進んでいます。

現在、数種類の無農薬米を作っています。以前、食物アレルギーで苦しんでいた人から「實取さんの米は食べられた」という声を聞き、うれしくて涙が出ました。自分が作ったもので消費者に喜んでもらえる、これも農業の醍醐味ですね。今後はもっと技術を磨き、環境負荷の少ない農業を地域に広げていきたいです。

若手農家に話を聴きました

地域資源を生かして自分スタイルの農業を

野菜農家 なかしまともみ 中島智美さん（滝）



慣れた手つきで畑を耕す中島さん。野菜は全て無農薬栽培（写真㊻）。農園カフェ「うぶとも」。コーヒーやかき氷などのほか、畑で取れた新鮮な野菜を使った料理も提供（写真㊼）。農園カフェで開いたマイ箸作り。子どもから大人までさまざまな世代が集う（写真㊽）。

小さい頃から祖父母の農作業を手伝っていたことや、食育をしていた母の影響もあり、農業や自然が好きでした。今は親戚の畑を借りて、サツマイモやサトイモを主に露地野菜を作っています。全くの素人で始めた農業ですが、周りの人や企業の協力、青年就農給付金などの支援制度を活用して、少しずつ軌道に乗ってきました。

農業を続けるときに大切なことは、自然との共生と地域の人たちとの交流だと思っています。その一つとして、毎年、地域の皆さんと一緒に千畳河原の清掃活動を行っています。ことさら河川敷の花いっぱい運動も始めます。昨年、規格外野菜の活用と地域交流、観光客の休憩所を目的にカフェを始めました。ここは風光明媚で、近くには大場堰と千畳河原があり、夏場は大勢の人でにぎわいます。農業体験や婚活イベントなど、今後も地域資源を生かしながら、農業・農村の魅力を発信していきたいです。

農業は、野菜などを作って売るだけでなく、環境を守ったり地域を元気にしたり、いろんなスタイルがあつていいと思います。固定観念にとらわれず、未来につながる農業をしていけば、将来も必要とされる産業として、若い人たちに引き継がれていくはずですよ。



I  
ターン

農業を守る取り組みが広がっています

地域で農業と農村景観を守る

多面的機能支払交付金制度

基幹産業である農業と豊かな農村風景を後世につないでいくために、昨年12月、菊池地域広域協定運営委員会が発足しました。近年、農村集落の高齢化や人口減少などにより、農業施設や農村風景、農地特有の生態系を維持することが難しくなっています。こうした農業・農村の多面的機能を守るため、集落同士が連携・協力し、地域で農業施設の維持管理や景観保全を行っています。



**用** 水路の整備など集落単位では厳しかった作業も、これからは助け合っています。農地・景観の保全は地域全体でやっていくという意識を高めていきたいです。



世本哲郎会長（下西寺）

**花** 植え作業に参加しました。農業は楽しい。トラクターを動かしたり野菜をつくったり、家の手伝もしています。将来は野球選手が農業をしたと思っています。



若下弘樹さん（菊池南中1年）

1. 農道沿いに花を植える参加者たち。約6,000株の苗を植えた
2. 農業用水路の水質検査。子どもたちが農業を学び、関心を持つきっかけにもなっている
3. 2月に土地改良区主催で行われた景観保全活動には、約150人の地域住民が集まった

農・商・工連携で農業に光を!

くまもと里モンプロジェクト推進事業

NPO法人きらり水源村では、昨年度から県の補助事業を活用し、生産者と加工・販売業者と連携して地域性豊かな商品を開発する取り組みを進めています。素材は生産者が提供し、難しい加工技術を専門家がカバー。それぞれのノウハウを連携して生かすことで、地域での6次産業化、地産地消の商品作りを推進し、農業と商業の活性化、後継者育成を図ります。



**プ**ロが作るものは手間がかかっていて勉強になりました。昔は普通にあった野菜もだんだん減っています。こうした農産物を使えばブランド化もできると学びました。



河上ミチヲさん（岩平）

**見**ていると簡単そうだけど、やってみると難しかったです。6次産業、経営、加工の仕方などを勉強しています。将来は祖父の農地を使って農業をする予定です。



小島竜也さん（菊池農高2年）

1. 和菓子職人の中原大松さん（中原松月堂）。「生産者とギブアンドテイクでオリジナル商品を作りたい」
2. 生産者が耕作放棄地で栽培した県特産品の「肥後小豆」で作ったおはぎ
3. プロの手ほどきを受けながら和菓子作りに挑戦。菊池農業高校生も参加

6次産業の成功モデルとして全国各地から注目を集める株式会社コッコファーム。地域住民を中心に、行政、JA、民間企業と連携した農業によるまちづくりを掲げ、農業と地域の活性化を図っています。同社の松岡会長に農業への思いを伺いました。

未来を守るために

菊池は豊かな自然に恵まれたまちです。基幹産業である農業はその恩恵を受けつつ、美しい農村の景観と環境を守る役割も果たしてきました。一方で、高度経済成長期には農業から工業へ、農村から都市へと人が流れていきました。その結果、環境破壊や過疎といった問題が生まれています。こうした問題を次世代の子どもたちに背負わせてはいけません。

農業を守ることは日本の未来を守ることに繋がります。未来を担うのは若い世代です。社長は農業を「若者が就きたい職業ナンバーワン」にすることを目指しています。そのためには農業がビジネスとして成立し、夢と希望を持てる職業にしなければなりません。平成23年にオープンした「たまご庵」では、生産者直売の物産館を備え、農業者の育成を図っています。消費者

と接する機会が増えたことで、消費者と直接つながり、独自に販路を拡大する力強い農業者も育っています。田舎の魅力に引かれて農業を始める若い人も増えてきました。情報発信の拠点として「菊池に行ってみよう、住んでみたい」と感じていただける取り組みを進めたいと思っています。

農業と観光業は両輪で考える

「食」は観光で最も大事な要素です。観光客はそこでは味わえない感動を求めて訪れます。交流人口を増やし地域経済を活性化していくためには、食を支える農業の発展が不可欠です。

農業が衰退すれば魅力ある食が消え、訪れる人が減って観光も衰退するでしょう。農業と観光業を両輪とらえ、関係者同士が連携して地域経済の活性化に取り組むことが重要です。

大切なのはアクションを起こすこと

これから就農を目指す人には、たくさん勉強しているろんなことを吸収してほしいですね。失敗を恐れず、どんどん新しいことにチャレンジしてください。大切なのはアクションを起こすことです。私は20歳でゼロから養鶏業を

始め、失敗を繰り返してきました。それでも強い思いを持ち、アイデアを行動に移すことで道を開いてきました。人とのつながりを大切に、新しいことを学び、そこから生まれたアイデアをカタチにしてほしいと思います。皆さんの成長が、まちの未来を守ると信じています。



農業を若者が就きたい職業ナンバーワンにしたい

株式会社コッコファーム 松岡義博 会長

**Profile** まつおか・よしひろ  
昭和24年1月30日生まれ。農家の長男として生まれ、中学校卒業と同時に農業の専門学校に1年間修学。一度は家を継ぐものの離農し横浜へ。11種類の職を転職した後、菊池の自然の素晴らしさを見直し帰郷、現在に至る。2006年高年齢者雇用開発コンテスト優秀賞、県農業コンクール大会グランプリ、第56回全国農業コンクール全国大会グランプリ、第1回再チャレンジ支援功労者表彰、フードアクション日本アワード2009、中小企業IT経営力大賞などを受賞。菊池市教育委員。中原区在住。66歳。



⑤地域との共生、都市と農村の交流、情報発信の拠点と位置づける「たまご庵」。物産館やレストラン、インキュベーション施設などを備え、年間約110万人が訪れる。④大ヒット商品の「朝取りたまご」は会長のアイデアから生まれた。⑥店内には地元生産者の農産物がずらりと並び

市は昨年、農産物の独自の品質基準をつくり、インターネットショップを開設しました。農作物のブランド化を促進し、全国の消費者に売り込みを行って行っています。現在の取り組みと今後の目標について、江頭市長に話を聴きました。

菊池基準で農産物をブランド化

豊かな自然と水に育まれた菊池の農産物は「味が濃くてうまい」と、有名レストランのシェフも認めるおいしさです。しかし、全国ではその良さがほとんど知られていません。近年は健康志向や安全な食を求める声も高まっており、こうしたニーズへの対応も必要でした。

そこで、本市の農産物を安心安全な菊池ブランドとして全国に発信するため、独自の品質基準となる「菊池基準」をつくりました。昨年10月にはインターネットショップ「菊池まるごと市場」をオープンし、全国都市圏の消費者をターゲットに販売しています。今後はさらに菊池ブランドを定着させ、潜在的観光客の掘り起こしも行っていきます。そのためには生産者の皆さんの協力が必要です。ぜひ、菊池まるごと市場への登録をお願いします。

菊池の米を世界にアピール

米どころ菊池の復活に向け、菊池米のブランド化も進めています。その一環として、毎年11月に「菊池米」食味

コンクールを開催し、菊池米の知名度アップと生産者の技術向上を行ってきました。ことしはの大会はこれまでにない規模になりそうです（次ページ参照）。皆さんが作った自慢の米で挑戦してみませんか。多くの参加をお待ちしています。

こうした積み重ねが実を結び、来年は本市で「第18回米・食味分析鑑定コンクール国際大会」の開催が決定しました。これは菊池米を世界にアピールする千載一遇のチャンスです。現在、生産者、行政、JAなど関係機関が協力して品質強化に取り組んでいます。菊池の農業の可能性は無限大です。これからも菊池の「農力」を最大限に引き出し、「儲かる農業」を目指していきます。

「まるごと農人」でまちを元気に

農業は、私たちの食を支える大事な仕事です。自然環境を守り、美しい景観をつくり、地域経済の礎にもなっています。菊池には、農業を守り、地域を元気にしようと頑張っている人がたくさんいます。農家以外の人もできることはあります。地元の農産物を買って、作り手の思いに触れ、食べて、人に自慢する、地産地消の取り組みです。農業が元気になるれば、まちが元気になるります。農に関わることは、まちづくりになります。農に関わることは、まちづくりになります。みんなで農に関わる「農人」になって、元氣なまちをつくっていきましょう。

農業は、私たちの食を支える大事な仕事です。自然環境を守り、美しい景観をつくり、地域経済の礎にもなっています。菊池には、農業を守り、地域を元気にしようと頑張っている人がたくさんいます。農家以外の人もできることはあります。地元の農産物を買って、作り手の思いに触れ、食べて、人に自慢する、地産地消の取り組みです。農業が元気になるれば、まちが元気になるります。農に関わることは、まちづくりになります。農に関わることは、まちづくりになります。みんなで農に関わる「農人」になって、元氣なまちをつくっていきましょう。



儲かる農業を目指す

菊池市長 江頭 実



インターネットショップ「菊池まるごと市場」。現在、菊池基準を満たした約180品の農産物や加工品を掲載中。アドレス <https://www.kikuchi-marugoto.jp/>

菊池まるごと市場への出品者を募集中です

- 菊池まるごと市場では、菊池基準を満たす農産物や加工品を販売しています。出品したい人は下記の物産館などで会員登録と商品登録をお願いします。詳しくはお問い合わせください。
- 農政課ブランド推進室 ☎0968(25)7266
  - きくち観光物産館 ☎0968(25)5477
  - 道の駅旭志 ☎0968(37)3719
  - 道の駅泗水養生市場 ☎0968(38)6100
  - 七城メロンドーム ☎0968(25)5757
  - ファームきくち ☎0968(26)5960
  - JA菊池販売企画課 ☎0968(23)3201